

中田真由美（編著）/清本憲太，岩崎テル子（共著）

新 知覚をみる・いかす

—手の動きの滑らかさと巧みさを取り戻すために

阿 部 薫

（慶應義塾大学病院，作業療法士）



秀逸な本が刊行されました。編著者が8年の歳月をかけて執筆した本書は、表題に「新」と冠する通り、2003年に刊行された『知覚をみる・いかす—手の知覚再教育—』を踏襲する内容がある一方、大幅に加筆され非常に読み応えのある内容となっています。セラピストの臨床疑問に答える形式や観察から治療へ導く思考に添う構成は継承されていますが、圧倒的な内容の充実が図られ、すでに前著で既知となったことでも、再度見直していただく知識の確認やさらなる理解につながる豊富な内容です。

第1章「臨床観察から理解する手の知覚障害と動作障害」では、手の動きと識別、手のフォームと知覚の関係が明らかにされ、さらに、セラピストが症例を通して抱く、人は「何を感じるのか」、「なぜ感じるのか」という疑問に答えることで、知覚アプローチを考える手がかりを示しています。第2章「体性感覚の神経生理学的基礎—手の知覚機能とその障害に関連して」と第4章「知覚障害の部位と特徴」では、知覚を理解する

ために必要な基礎知識が詳述されています。知覚が単なる刺激応答の可否を論ずるものではなく、末梢で刺激を感受し伝導され、そして中枢の働きを経て動きを支える一連の生体反応が理解できる内容となっています。第3章「知覚評価—検査項目の選択と実施、結果の解釈」では、かなりのページ数を割いて各検査が解説されています。検査の手技にとどまらず、その意義や適応、そして解釈まで解せる内容となっています。そして第5章「知覚のリハビリテーション」では、本書の副題である“手の動きの滑らかさと巧みさを取り戻すため”の知覚のリハビリテーションの実際が、詳細に述べられています。各章のはじめに掲載されている編著者の意図を示す小文は、知覚を学ぶうえでの道標です。ぜひ、目を通して読み進めていただくことをお勧めします。

さらに本書では、第3章と第5章に、知覚の評価や知覚のリハビリテーションの歴史の変遷が記されています。編著者が意図する、過去から学び今に活かす内容であるとともに、先を見ることも叶う

興味深い記述です。また第5章には、セラピストが古来よりその対応に難渋し、課題として抱えてきた“痛み”についても詳しく解説されています。

知覚は、目に見えず、つかみどころのないものです。しかし本書では、手の使用における知覚の働き・役割を容易に思い描けるよう解説され、目に見えない知覚の働きを可視化する術が身につけられるようになっています。さらに、症例の抱える知覚の問題に対して、具体的なリハビリテーションアプローチが根拠とともに提示され、この問題に果敢に挑む意欲が一層鼓舞されます。

本書は、本邦におけるこの分野の先駆者である編著者の名著であり、知覚に関心をもつすべてのセラピストのバイブルとなることを信じて疑いません。僥越ながら、本書評を記する機会をいただき、光栄の至りです。

B5判 420頁 7,000円＋税
協同医書出版社 刊
☎ 03-3818-2361